

「井勘定の子育て」でも、いいのでは……

小児の「強迫性障害」という診断名に初めて接し、この際少し知りたて、「『いい子』を悩ます強迫性障害 Q & A - 『こだわる』理由がよくわかる - 」という、事例が主の書籍を購読した。

特定の人に脅される「脅迫障害」でなく、「強迫障害」とは常に正体不明の不安に迫られるイメージとか。

親の意を汲んで、必死にいい子を担うと、余裕のない生き方をせざるを得ない状況になり、弱音や愚痴を吐いてもいいと云われても吐けないのが、「曖昧さを認めない、いい子」の苦しさとか。その正体不明の不安を取り除こうにも自分で取り除けないことが「強迫観念」となり、これを打ち消す意識的行為が強迫行為となり、例えば、水道で何度も何度も手を洗う「こだわり」行為になるよう。そうしている時は、強迫観念が納まる（心が安定する）が、また不安になると心の安定を求めて強迫行為がエスカレートするよう。（中には脳の器質障害、機能障害の事例もあるようだが、障害児の「こだわり」の見方へのヒントもありそうに思う。）

また、人間関係（親、友人）のストレスからの不安がる自分の自己否定が、次第に、不安の理由が自分になく、向き合う他人（主に親）に不安材料を見つけようとして、親への悪態、閉じこもり、家庭内暴力等に繋がることもあるよう。著者である心理カウンセラーは、それらも、心の安定を求めての親への甘え・依存の裏返しであろうともいう。

それだけに、著者は、意味のない行動はあり得ないのだから、周りの大人は言動の背景にある不安にいつまでも寄り添い続け、「聴き続ける」ことを、また「子どもが感じている世界を、可能な限り解ろうとする姿勢が必要」という。

やはり、それぞれの事例の背景が異なるだけに、これという解決策はないようで、こうした「聴く」姿勢を学ぶには、親共々、専門機関のカウンセリングを受けることが必要になるだろうと思う。

また、著者は、大人の価値観での「いい子」への子育てをせず、曖昧さ、いい加減さを認める「井勘定の子育て」という、親自身の価値観変容も必要といたいのだろうなあとも思う。

それにしても、著者も触れているが、大人の価値観に影響を与えている効率性、合理性優先、また、人間関係希薄の現代社会だけに、これからの世の中、益々「親になるのは易しいが、親であることは難しい」と、つくづく感じる本であった。

（2005年3月25日 記）